中世における大学の始まり：パリとボローニャ

藤　原　淳　賀

序
中世における大学を備えた知的伝統
　A. 自由七科
　B. カロリング・ルネサンス
　C. 12Cルネサンス
Ⅰ．12Cの諸学校
　A. 宮廷学校
　B. 修道院付属学校
　C. 司教座聖堂付属学校
　D. 世俗の専門教育学校
　E. 都市に生まれた大学
Ⅱ．自然発生した大学：ボローニャ大学，パリ大学
　A. 大学の始まり
　B. パリとボローニャで大学が始まった要因
　　経済的発展，ギルドの形成，法律知識の社会的ニーズ，叙任権闘争
　C. パリ大学を備えたもの
　　教員と学生のギルドとしての大学
　D. ボローニャ大学の始まりと組織
　　コンソルティア，ソキエタス，ナチオ，ウニウェルシタス，そしてコレギウム
Ⅲ．ストゥディアム・ゲネラーレ
　　万国教授資格
まとめ

序

筆者の関心は，大学において学問をするということの性質，特に大学における学問研究と教育の自由にある．そのことを念頭に，昨年（2021)「中世におけ

る大学を備えたもの：自由七科，カロリング・ルネサンス，そして12世紀ルネサンス」を記した.[1] 折しも日本学術会議が推薦した会員候補のうちの一部（6名）が当時の内閣総理大臣，菅義偉氏によって任命されず，マスコミが大きく報じた時期でもあった.

本稿においては，初期の大学の成り立ちおよび性質を論じていく．大学の出自を明らかにし，大学が依っているものを見出し，大学がいかに生まれ，いかに育っていったかを明らかにすることは，大学における学問研究の性質を論じるための基礎研究である．本稿では最初期の二大学，ボローニャとパリを論じていく.

中世における大学を備えた知的伝統

大学は中世ヨーロッパに生まれた．かつて中世は暗黒時代であったと考えられていたことがあるが，中世は多くの文化的，経済的，教会的発展をもたらした時代であった．今日まで続く大学を生み出したのも中世であった.

大学の誕生は，それまでの長きにわたる知的伝統に支えられていた．古代ギリシアとローマに源を遡ることのできる自由七科，フランク王国カロリング朝におけるカロリング・ルネサンス，そして12Cルネサンスがその重要な基盤であった.

A. 自由七科

自由七科とは，文法，修辞学，弁証論の三科（trivium）と，算術，天文学，幾何学，音楽の四科（quadrivium）であり，中世西洋の教育において必須とされた7学科である．自由七科は12Cにおいても重要な基礎教養であった．大学教育はこれらの上にある高度な専門的教育として発展した．中世には，今日われわれが考える初等教育，中等教育，高等教育という区別は明確になかっ

1　拙著,「中世における大学を備えたもの：自由七科，カロリング・ルネサンス，そして12世紀ルネサンス」青山学院大学宗教主任研究叢書『キリスト教と文化（36）』, 57–88.「中世における大学を備えたもの」は本論文の基礎となる内容を扱っているため,「序」においてその要約を記しておく.

た．大学が生まれると，専門教育（神学，法学，医学）の前に教養学部においてこれらの基礎教育が行われることがしばしばあった。

B. カロリング・ルネサンス

西ローマ帝国崩壊（476）後，イベリア半島とブリタニアを除く西ヨーロッパを再び統一していったのはカロリング朝フランク王国のカール大帝（Charlemagne, 位768-814）であった．ピピン３世（Pippin III, 位751-68）とその子カール大帝の強い指導の下，８C末から９C初めにかけて大きな文化的発展が起こった．カロリング・ルネサンスである．これは西ヨーロッパのカトリック・キリスト教に基づく文化を復興させる運動であった．カールは，西ヨーロッパをキリスト教世界として統治することが自らの使命であると考えていた．彼が招いたヨークのアルクイン（Alcuin, 735頃-804）はその中心的人物である．カロリング・ルネサンスは，宮廷学校，修道院学校，司教座聖堂付属学校を整え，そこで自由七科教育を行い，西ヨーロッパにラテン語文化を復興させた．またカトリックの正しい礼拝形式と聖書理解を広めることに貢献した．古典文献の収集が行われ，カロリング小文字体で写本の作成が行われた．ラテン語が中世西欧の共通語として整えられていく．このような文化的発展は，カールの死後は衰退していくのだが，ラテン語文化は，後に大学が生まれてくる基盤，いわば知的インフラストラクチャーとして保たれていた．

C. 12Cルネサンス

12Cルネサンスとは，西ヨーロッパが古代ギリシア，ローマの伝統を再発見したことによって起こった急激な文化的発展である．大学はこの文脈の中で誕生していった．

西ローマ帝国の崩壊（476）もあり，西ヨーロッパでは古代ギリシアの知的伝統の多くが失われていた．しかしギリシア語を話すビザンティンにおいては古代ギリシアの伝統は生きていた．また７Cに生まれたイスラームは急激に中東，北アフリカを侵略していくのだが，征服した地の優れた伝統を吸収，保存，発展させる傾向があった．そのため古代ギリシア，ローマの知的伝統はイスラームの内にも見出すことができた．イスラームのイベリア半島，西ゴート

への侵攻は711年に始まる．レコンキスタによってそこを去る1492年まで約780年に亘って彼らはイベリア半島に留まっていた．

かつての西ゴート王国の首都トレド（イベリア半島）と，長い間ビザンティンの影響下にあったシチリアのパレルモとメッシナまた南イタリアで，ギリシア語，アラブ語の文献がラテン語に翻訳され，西ヨーロッパに急速に入ってきた（大翻訳時代）．西ヨーロッパはその南西（イベリア半島）と南東（南イタリア・シチリア）を通して古代ギリシア，ローマの文化に出会ったのである．【図１】

イスラームは単に古代ギリシア，ローマの知的遺産を受け取っただけでなく，彼ら独自の合理的，実証的な精神によってそれらを解釈，発展させていた．12Cヨーロッパは，古代ギリシア，ローマ文化と共にイスラーム文化も受け取っていく．

哲学，数学，天文学，医学，神学がこの時代に発展した学問領域であり，12Cルネサンスの関心事であった．文学，歴史，芸術といった領域は12Cルネサンスの主たる関心事ではなかった．それらは第二次古代復帰としての14Cルネサンスにおいて発展していくことになる.[2] 大学はこの時代精神の中で生まれていった．初期の大学においては，文学や歴史学は扱われておらず，教育されることも研究されることもなかった.[3] 大学での文学研究は，しばらくしてから一般教養教育の中で行われていくことになる．

Ⅰ．12C の諸学校

12Cの西ヨーロッパには４つの重要な学校があった．(1)宮廷学校，(2)修道

2　14Cルネサンスにおいても，イタリアがそれまでに既に持っていたものが花開いていく．それはボローニャ大学の誕生と発展においても見られるのだが，イタリア的性質といってよい．その特徴は古典（古代ギリシア，ローマの伝統）への関心，法学，医学に見られる実用的関心，世俗性，都市との結びつきといったものである．

3　チャールズ・H・ハスキンズ,『十二世紀ルネサンス』別宮貞徳, 朝倉文市訳,（みすず書房, 1997）, 251–253.

院付属学校，(3)司教座聖堂付属学校，そして（4)世俗の専門教育学校である．

A. 宮廷学校

宮廷学校は宮廷付属礼拝堂から発展していったものと考えられている．キリスト教的教育がなされており，文化的復興とフランク王国の（司教，修道院長を含んだ）要職の人材養成を目的として始まった.[4] カール大帝は，アイルランド人，イタリア人，西ゴート人，アングロ・サクソン人の古典の教養の深い多くの優れた学者を招いている.[5]

B. 修道院付属学校

修道院付属学校と司教座聖堂付属学校は，より明確にローマ・カトリック教会の学校であった．8Cにカール大帝が出した「一般訓令（Admonitio Generalis)」(789）にはフランク王国をキリスト教国として整えていくという彼の意図が明確に表れている.[6] その72条で，正しいキリスト教を広め，すべての司教座聖堂とすべての修道院が学校を設立することを定めている.[7] カールの

4　Hastings Rashdall, *The Universities of Europe in the Middle Ages, vol. 1: Salerno, Bologna, Paris*, Cambridge Library Collection, (Cambridge University Press, 2010), 28.

5　オイゲン・エーヴィヒ,『カロリング帝国とキリスト教会』, 瀬原義生訳.（文理閣, 2017), 69–70. 五十嵐修,『地上の夢キリスト教帝国：カール大帝の＜ヨーロッパ＞』講談社選書メチエ224,（講談社, 2001), 108–9.

6　河井田研朗.「カロルス大帝の「万民への訓諭勅令」(Admonitio Generalis)（七八九年）の試訳」「キリスト教文化研究所年報」1–27. ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所（1979.3.). 117–150. 河井田研朗,「カロルス大帝の「万民への訓諭勅令」(Admonitio Generalis)（789）の注解」「福岡大学人文論叢」36, 4 (2004), 1273–1295.

7　「聖職者は，自分の身の回りに非自由身分の子どもたちばかりではなく，自由身分の子どもたちを集めるように努めるべきである．子どもたちに，読み書きを学ばせるための学校が開かれなければならない．すべての修道院および司教座聖堂において，詩編，速記法，歌唱，計算，文法を教えること．また宗教書を正確に正すこと．というのは，神に正しい形で祈ろうと願う人がいても，本が不完全で誤りがあるために，それができない場合が生じるからである．読む場合においても，書く場合においても，あなたたちの弟子が誤った解釈に陥ることを許してはならない．もし，福音書，詩編，ミサ典書の写本を作る必要性がある場合には，正確な写本を作ることのできる熟達したものがこれにあたるべきである．」72条（五十嵐訳), 五十嵐修,『地上の夢　キリスト教帝国：カール大帝の＜ヨーロッパ＞』. 講談社, 2001), 101, 116–7. ランス，トロワ，ル・マンにおける学校が特に発展した．ジョゼフ・カルメット,『シャルルマーニュ』川俣晃自訳, 文庫クセジュ（白水社, 1968), 85.

時代，特に修道院学校での教育が重要であった．修道士たちが古代の文化を保存，継承した.[8] 修道院は，将来の修道士のためだけでなく一般の子どもたちのためにも教育の門戸を開いた．また司教座聖堂学校の教師も修道院で教育を受けた者が多かった．

12Cの修道院付属学校においても大聖堂付属学校においても，アルクインの教育の伝統が残っていた．自由七科教育の上に神学教育がなされた．教師がテキストを読み説明した．書かれている内容を文法的に正確に読み取ることを教え，その内容と背後にある意味を講義した．12C以降，自由七科は市民法，教会法，医学，神学を学ぶための準備という位置づけになっていく.[9]

C. 司教座聖堂付属学校

第３ラテラノ公会議（1179）においてすべての大聖堂教会は聖職者や貧しい学生に対して無償で教育を行うことが確認されている.[10] しかし，そのような教育が十分に実践されていないとして第４ラテラノ公会議（1215）においても再度確認されている.[11]

8　特にアイルランドの修道院が果たした役割が大きい．

9　ディルセー，『大学史・上』, 7.

10　“18. Since the church of God is bound to provide like a mother for those in want, with regard to both the things which concern the support of the body and those which lead to the progress of the soul, therefore, in order that the opportunity of learning to read and progress in study is not withdrawn from poor children who cannot be helped by the support of their parents, **in every cathedral church a master is to be assigned some proper benefice so that he may teach the clerics of that church and the poor scholars**.” （Emphasis in the original.）第三ラテラノ公会議（1179）決議文から. https://www.papalencyclicals.net/councils/ecum11.htm#15

11　“11. **On schoolmasters for the poor**
Zeal for learning and the opportunity to make progress is denied to some through lack of means. The Lateran council therefore dutifully decreed that ‘in each cathedral church there should be provided a suitable benefice for a master who shall instruct without charge the clerics of the cathedral church and other poor scholars, thus at once satisfying the teacher’s needs and opening up the way of knowledge to learners’. This decree, however, is very little observed in many churches. We therefore confirm it and add that not only in every cathedral church but also in other churches with sufficient resources, a

教育の中心は次第に修道院から大聖堂に移っていた．修道院学校の多くは地方にあり，12Cには生徒を集めることにも，教師を集めることにも苦労していた．11C以降，特に都市の大聖堂附属学校が発展していた.[12] 大学は都市の司教座聖堂付属学校から生まれていくことになる．

修道院附属学校には強い教会的雰囲気があったが，12Cの司教座大聖堂付属学校には世俗的雰囲気が見られた．都市は人々を世俗的方向へと導く．また学生は教会に所属している必要がなく，教員も教会に属してはいても，聖職者というよりも都市労働者というアイデンティティの方が強かった.[13]

学生たちは国外であっても有名な教師がいれば学ぶために移動した．多くの学生が集まることで都市は豊かになり，そのような教育研究機関の存在は都市の名声を高めた．しかし学生たちの素行には問題もあり，しばしば町の人々と問題を起こし，暴力沙汰になることがあった.[14] そのような問題は大学にも受け継がれていく．いわゆるタウンとガウンの問題である．

フランスでは神学教育が中心であった．パリにはいくつかの優れた学校があった．既に法学校や医学校も確立していたが，大聖堂付属学校での神学教育

---

suitable master elected by the chapter or by the greater and sounder part of it, shall be appointed by the prelate to teach grammar and other branches of study, as far as is possible, to the clerics of those and other churches." 第４ラテラノ公会議決議文（1215）から. https://www.papalencyclicals.net/councils/ecum11.htm#15
Cf. 藤崎衛監修,「第四ラテラノ公会議（1215年）決議文翻訳」『クリオ』29号（2015）, 87-130. https://docs.google.com/viewer?url=https%３A%２F%２Frepository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp%2Frecord%2F52077%2Ffiles%2FCLIO_29_6.pdf

12　ジャック・ヴェルジェ,『中世の大学』, 大高順雄訳,（みすず書房, 1979）, 5-7. ボローニャのサン・フィリーチェ，パリのサン・ヴィクトル，サント・ジュヌヴェイーヴ，ラン，ランス，オルレアン，トゥール，シャルトル．アンセルムがいた頃のラン，アルベリックがいた頃のランスは神学教育で知られていた．

13　Ibid., 25.「アベラルドゥスはノートル・ダム聖堂参事会員ではあったが、収入の主要な部分を生徒の謝金や贈り物から得ており、自分の学校を『金銭的利益を得るために』ad lucrandam pecuniam開いたのだと自ら書いている。」

14　飲酒を伴う喧嘩や賭博が主要な問題の要因であった．ヘイスティングス・ラシュドール,『大学の起源・上：ヨーロッパ中世大学史』横尾裝英訳,（東洋館出版社, 1966）, 177.

が最も有名であった.[15] その教師は教会参事会員が多かった．これがパリ大学へと発展していく.

D. 世俗の専門教育学校

この時代には，宮廷学校，修道院学校，司教座聖堂付属学校の他に，世俗の専門教育学校が発展していた．神学教育がフランスにおいて発展したのに対し，世俗の専門教育学校はイタリアにおいて最も発展した（法学校と医学校）.

フランスにおいてもイタリアにおいても，またヨーロッパのどの地域でも，自由七科が教育の基礎教養と考えられていた．アルプス以北では弁証法（神学と論理学）に関心が集まっていたが，アルプス以南の主な関心は文法とレトリックと法であった.[16] キリスト教史を学んだ者には，ローマ教会は初期から実用的傾向があったことが広く知られている．イタリアでは聖書や教父文書の学びよりも法廷での論争や法律文書作成に関心があった．古代ギリシアのソフィスト的伝統や古代ローマの教育と文化の伝統は彼らの性質に沿ったものであったといえよう.[17] パリが思索的かつ教会的であったのに対し，ボローニャは――決して反キリスト教的であったわけではないが――現実主義的かつ世俗的であった.

教会との結び付きが強くない市民法学と医学がイタリアでは発達した．イタリアの実用主義的精神にかない，また法学と同様に多くの収入につながるものは医学であった.[18] これらがボローニャ大学へとつながっていく.[19]

南イタリアは伝統的にビザンティンとの繋がりが強かった．ユスティニアヌス１世（Justinianus I, 483–565）の再征服から11世紀までビザンティン帝国に属していた．南イタリアでは東方との交易が継続しており，ギリシア語が話されていた．港町アマルフィにはユスティニアヌスⅠ世が編纂させた古代ローマ

15　ディルセー，『大学史・上』, 87.

16　ボローニャ法学校ができてからはレトリックと文法も単なる準備科目とみなされるようになる．ラシュドール，『大学の起源・上』, 205.

17　Cf. ラシュドール，『大学の起源・上』, 104-106.

18　Ibid., 205.

19　ヴェルジェ ,『中世の大学』, 34.

法の『学説彙纂』（533）の写本があった．真偽の程はわからないが，1135年にアマルフィを占領したピサ市民がその写本を持ち帰り，これがローマ市民法の復活（the civil law revival）へと発展したといわれている.[20] ローマおよび北イタリアのパヴィア，ラベンナの法律学校はボローニャ以前から発展していた．

アマルフィから25kmほど東の海沿いの町サレルノも常にコンスタンチノープルと繋がっていた．ギリシア文化の影響が強く，既に９Cには医学校があった．古代ギリシアからの医学教育に加えて，解剖，外科教育も行われていた.[21] サレルノ医学の名声は，ボローニャの法学やパリのスコラ学よりも先に確立していた.[22]

E. 都市に生まれた大学

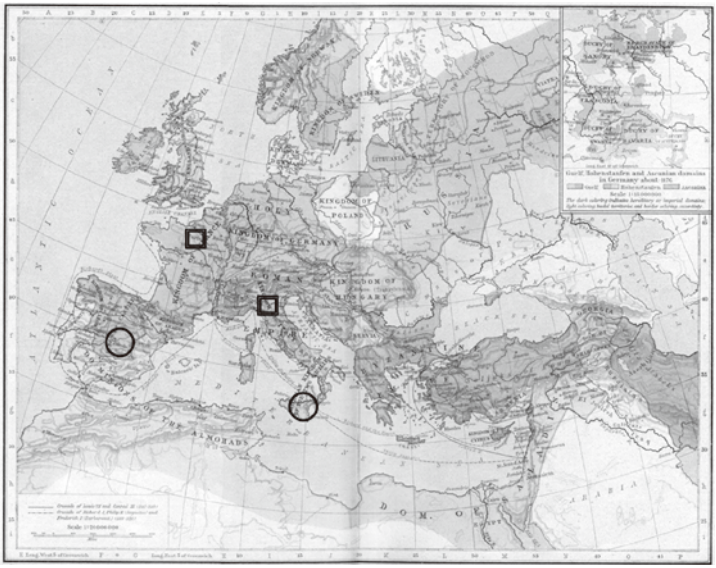
ハスキンズ（Charles Homer Haskins, 1870-1937）は，ヨーロッパ内におけるラテン語文献の再発見と，ヨーロッパ外で保存されていた古代ギリシア語文献および，ギリシア文化を吸収したアラビア語文献のラテン語への翻訳が12Cルネサンスをもたらし，それが「大学の誕生」へと繋がったと考えているが，それは正しい.[23] 上記のように，12Cにギリシア語，アラビア語からラテン語への翻訳が大きく進み，古代ギリシア・ローマの知的遺産とイスラーム文化がヨーロッパに急激に入ってきた．トレドとシチリアが翻訳センターであった

20　三成美保,「中世ローマ法学――註釈学派と注解学派」2015.「1060年ころ、ピサ人たちが、ビザンツのアマルフィから学説彙纂の最古の手写本をピサにもちかえった（ピサ写本、のちのフィレンツェ写本）。1070年ころには、ピサ写本の手写本がボローニアにとどき（ボローニア本、または通俗本とよばれる）、法学研究がはじまる。これを『ローマ法学の復活』とよぶ。」https://ch-gender.jp/wp/?page_id=1955
ラシュドールは，これは事実ではないと記している．ラシュドール，『大学の起源・上』, 109. Ibid., 188も参照.

21　ヴェルジェ ,『中世の大学』, 3.

22　ラシュドール，『大学の起源・上』, 91. しかしラシュドールはボローニャの医学校を「真の解剖学の最初の本場」と記している．Ibid., 212.

23　野口洋二,「訳者あとがき」, ハスキンズ,『十二世紀ルネサンス』, 376.　Cf. 小澤実,「訳者解説　十二世紀変革論の現在」, ジャイルズ・コンスタブル,『十二世紀宗教改革』高山博, 小澤実, 図師宣忠, 橋川裕之, 村上司樹訳,（慶應義塾大学出版会, 2014）, 425; 朝倉文市,「解説」, ハスキンズ,『十二世紀ルネサンス』, 339.



【図１】

（地図の◯）．しかし多くの翻訳書があっても，優れた学者がいても，イベリア半島と南イタリアは大学を生み出さなかった．大学はパリとボローニャという交通の要所であった都市で生まれたのである（地図の□）[24]．

12世紀ヨーロッパには十字軍によってビザンティンやイスラームとの接触が増えていた．またイタリアの地中海商業が活発になっており，経済的に発展した都市があらわれてくる．豊かな都市では市民階層が育っていた．いくつかの都市は自治権を持つようになり，ギルドが発展してくる.[25]

ギルドは最初から都市と関係があったものではなく，初期のギルドはカロリング朝フランク王国の沿岸部に表れている．ギルド結成の動機は，他民族の侵入，部族制の崩壊といった変わりつつある社会的不安の中で，血縁コミュニ

24　William R. Shepherd, “Europe and the Mediterranean Lands about 1190,” Historical Atlas, Perry-Castañeda Library Map Collection, (University of Texas Libraries, 1926), 70-71. https://maps.lib.utexas.edu/maps/historical/shepherd/europe_mediterranean_1190.jpg
◯と□は筆者による．

25　ヴェルジェ，『中世の大学』, 16–18.

ティに代わる誓約のボランタリー・コミュニティの形成にあったと考えられている．職業ギルドには，商人ギルドと同職ギルドがあった．商人ギルドは個々の都市を超えた貿易を行っていたのに対し，同職ギルドは同じ都市内で職業別に形成された.[26]

都市の発展は多くの商業契約をもたらし，法律の知識を持った人々が必要とされた．かなりの数の教師が私塾を開き，実践的な教育を行うようになっていたことがわかっている.[27] 都市は経済的にも文化的にも発展した．また都市には仕事もあった．

この時代には移動や放浪が広く受け入れられていた.[28] 教師や学生の移動も頻繁にみられた．教育は中世の共通語，ラテン語で行うことができた．都市の自由な空気は学生を惹きつけていたし，都市は学生が滞在する場所を提供することもできた．これらが教師と学生のギルドとしての大学の出現を用意していった．

Ⅱ．自然発生した大学：ボローニャ大学，パリ大学

キリスト教の教育の主な目的は，聖職者となる者たちが，正しく生き，天に向かって歩み，また人々をそのように指導するようになることであった．修道院学校や司教座聖堂附属学校での自由七科はそのための教育であり，聖書，教父の著作等，教会にとって重要な文献を正確に理解することが重んじられた.[29]

26　谷和雄,『中世都市とギルド：中世における団体形成の諸問題』(刀水書房, 1994), 11–17.

27　ミラノでは1288年に70人以上の私教師がおり，基礎的な読み書き，計算，会計，公証についての実学教育を行っていたという．児玉善仁,「Studium generaleの概念―その普遍性と法的根拠をめぐって―」,『イタリア学会誌』25,（1977), 140.

28 「放浪や遍歴は，中世社会の一種の風潮（エートス）であった」という．ただ13Cまでの学生や教師はよく移動したが，14C以降は定住傾向が強まる．理由は教師の給与を領主が都市が出すようになりそこに留まるようになったということと，学生が地元の新設大学に行くようになったからである．他国の大学に行くことを禁じる領主も出てきている．横尾装英,『中世大学都市への旅』(朝日選書, 1992), 7.

29　自由七科に関しては，５C初頭のマルティアヌス・カペラ（Martianus Minneus Felix

聖職者とならない世俗の生徒たちのためにも，同様のキリスト教的方向性のもとに，職業訓練としての教育が行われていた．

大学では，以上のような伝統から大きく離れない限り，大胆な論理的議論によってある程度の学問の自由が認められていくようになる．特にボローニャにおいてはしばらくの間，教会と関係なく教育が行われていく．[30]

A. 大学の始まり

大学がいつ始まったのかは正確にわかっていない．しかし12Cに増加していった学校から自然発生的に発展したと考えられている．大学はボローニャとパリに現れた．その後，公に認可されていったことを教皇勅書や皇帝文書によって知ることができる．始めに大学の理念があり大学創立の全体像があったのではなく，大学は自然発生的に生まれ，それが後に形を整えていったのである．

その誕生の仕方から大学の歴史は３つのステージに分けることができる．[31] 第一に大学が自然発生した時代である．最初期の大学――ボローニャ大学，パリ大学――がそうであった．創立年はわからない．その後にパリ大学から生まれたオックスフォード大学も自然発生的に始まっている（12C後半–13C後半）．本稿ではこの時期の最初の２つの大学の始まりを中心に扱っている．

第二に大学が創立されていく時期である（13–15C）．大学というものがほぼ確立し，設置認可がローマ教皇と神聖ローマ帝国皇帝によって与えられるようになる．この２つが中世の普遍的権威であった．創立された最初の大学は，神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ２世が1224年に設立したナポリ大学である．[32]

Capella, 生没年不詳），ボエティウス（Anicius Manlius Torquatus Severinus Boethius, 480頃–524頃），カッシオドルス（Flavius Magnus Aurelius Cassiodorus Senator, 490頃–585頃）が重要である．拙著,「中世における大学を備えたもの」を参照.

30　ボローニャ大学は，教皇ホノリウス３世が1219年の教書でボローニャ大学での教授免許付与の権限をボローニャの助祭長に与えるまで，教会との関係は深くなかった．またボローニャ大学に神学部ができるのは1364年である．それまで神学の学位はパリとイギリスの大学においてのみ出されていた．ラシュドール,『大学の起源・上』, 216–7, 224.

31　Cf. 横尾壮英,『大学の誕生と変貌：ヨーロッパ大学史断章』東信堂, 117.

32　Ibid., 121.

ヤーコプ・ブルクハルト（Carl Jacob Christoph Burckhardt, 1818–97）が「中世の最初の近代人」と呼んだフリードリヒは幅広い学識を持っていた人物であり，大学の価値をいち早く見出していた．ナポリ大学は，教会から距離をおいた世俗の学校として作られ，市民法（ローマ法），リベラルアーツ，医学を教え，授業料は無料とされた.[33] 官僚になる道も用意されていた．

フリードリヒとの争いで知られる教皇グレゴリウス９世（Gregorius Ⅸ, 位1227–41）も大学に関する関心が非常に高かった．彼は後述する大勅書“Parens scientiarum”（諸学の親）「パリ大学にたいするグレゴリウス９世の大勅書」(1231）を出している．またそれに先んじて1229年，キリスト教の異端が多かったトゥールーズに大学を設立している.[34] この大学はドミニコ会の学校をもとに異端への対応を意図して設立されたのだが，法学の大学として有名になっていく．ホノリウス３世がパリ大学での市民法研究を禁じたことで（1219）法学者たちが移動してきたのである．

第三に普遍的権威である皇帝や教皇が影響力を失い，各国が大学を作ることができるようになった時代である（16C–現在).[35] プロテスタント宗教改革は，ローマ・カトリック一枚岩的であったヨーロッパの時代を終わらせ，プロテスタント諸地域を生み出した．それぞれの地域の状況に合った大学が創られていく．

ボローニャ大学は世俗的性格を持ち，パリ大学は教会的性格を持った．ボローニャ大学から南ヨーロッパ各地に大学が生まれ，パリ大学から北ヨーロッパ各地に大学が生まれた．ボローニャ大学は市民法学から始まった．イタリアはローマ・カトリック教会の中心地であったが，教師は世俗の者であり，学生

33 「フリードリヒ二世は（中略）いろいろな事態を完全に客観的に判断し，処理することに早くから習熟していた。この点で，彼は玉座に即いた最初の近代的人間であった。」ブルクハルトは，フリードリヒのイスラムの理解，教皇たちとの戦い，中央集権化からこのように評価している．ヤーコプ・ブルクハルト，『イタリア・ルネサンスの文化（上）』新井靖一訳，（筑摩書房, 2019), 19.

34 「トゥールーズ大学への勧誘書」（1229）を参照．ハスキンズ,『大学の起源』, 184–190.

35 ディルセー, 『大学史・上』, 9.



12–15C大学の地図

からの授業料によって生計を立てた．そのため学生の立場が強く，学生中心の大学として始まっていく.[36] パリ大学は神学から始まった．教師は聖職者であり，教会からの経済的援助があり，教員中心の大学として始まった．

大学運動はヨーロッパ全土に普及していった.[37] 大学を持つということは，王にとってもその地方の名声を高めるものでもあった．普遍的な権威を持つ教

36　ボローニャ大学の起源については，児玉善仁,『イタリアの中世大学』, 26–46が詳しい．ボローニャ大学の起源を司教座聖堂学校に求める学者たちと，（司教座聖堂学校では法学は教えられなかったとして）世俗の公証人養成学校に起源を求める学者たちがいる．ボローニャ大学の始まりは，パリ大学と比べると明らかに世俗的な要素が大きい．

37　12–15Cの大学の地図. William R. Shepherd, "Mediaeval Universities." *Historical Atlas*, Perry-Castañeda Library Map Collection, University of Texas Libraries, (New York: Henry Holt and Company, 1911), 100.
https://maps.lib.utexas.edu/maps/historical/history_shepherd_1911.html
https://maps.lib.utexas.edu/maps/historical/shepherd_1911/shepherd-c-100.jpg

皇や皇帝だけでなく，地方の王も大学を設立するようになっていく．

大学で教えられたのは神学，法学，そして医学であった．これらが大学における学問であった．また学生たちを大学の高等教育に備えるための一般教養科目も大学で教えられた．特に大学の言語であるラテン語の教育は重要であった．

ボローニャ大学とパリ大学は，13C初頭までに大学としての形を整えていったと考えられているが，大学設立文書，大学設立の目的，教育理念といった大学内部の文書は見つかっていない．大学が生まれ，動き始めた後に，いくつかの教皇教書，国王特許状といった大学の外部からの公文書が発行されている．それらのうち初期の重要なものを以下に記しておく．

1158年頃，神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ１世（Friedrich I, 位1155–90）が，いわゆる「**ハビタ**（**Authentica Habita**）」を出している（「勉学のために旅をする学生たちのための特権（Privilegium Scholasticum）」）.[38] 学生に危害を加えることを禁じ，学生たちが訴えられた場合には，市当局によってではなく（学生に対してより寛容な判断をする）教授たちや司教によって裁かれることを学生が選ぶことができると記されている.[39] この文書は「神聖な法律の教授たちのところへ，旅をするすべての学生たち」のためのものとして出されている．主にボローニャの法学校に学ぶ学生が念頭に置かれていると考えられるが，（ボローニャ以外の都市も含んだ）「すべての学生たち」に与えられた特権として記されている．これは法学校全体の発展を促した．

またこの「ハビタ」はローマ法をまとめたユスティニアヌス法典に，神聖

38　C・H・ハスキンズ,『大学の起源』青木靖三，三浦常司訳，（八坂書房，2009）, 163–165. 教皇アレクサンデルIII世（Alexander III, 位1159–1181）によって追認された．児玉,『イタリアの中世大学』, 38–40.

39　借金の取り立ては，パリでは債務者の教区の司教を介して行われていたが，ボローニャでは市当局が担当しており，借金が速やかに支払われない場合には，債務者と同じ出身地の者たちから取り立てるとされていた. Charles H. Haskins, “The Life of Medieval Students as illustrated by their Letters.” *The American Historical Review*, vol. 3, no. 2,（January, 1898）, 226.　オルレアンの法学教授が，問題を起こした学生のブザンソン（Besançon）にいる父親に送った手紙も参照せよ．Ibid., 227.

ローマ皇帝の勅令として入れられていることにも注目したい．学生たちの学びが広く普遍的な権利として守られるという意図が窺われる.[40] ただ，これは個々の学生のための特権である．この時点では，学生や教師の「団体化」は現れておらず，大学としての形が整う直前の段階であったと考えるべきであろう．

1200年，フィリップ２世（フィリップ尊厳王［Philippe-Auguste］，位1180–1223）がパリの学生たちに最初の特許状を与えている（「**フィリップ尊厳王がパリの学生たちに与えた特権**」）.[41] これは，パリの学生たち（聖職者と非聖職者）５人が殺された事件を受けて出されたもので，学生の権利を守る対応であり，大学共同体（ギルド）の存在が前提となっている．学生たちの安全が守られなければならないこと，問題が起こった場合には学生たちは（学生にとって有利な判決が期待できた）教会の裁判によって裁かれることが記されている．

その後1231年には教皇グレゴリウス９世が，**大勅書 “Parens scientiarum”**（**諸学の親**）を出している（「パリ大学にたいするグレゴリウス９世の大勅書」）．これは 1229年のパリ大学の「大解散」を受けて出されたもので，「パリの町が彼らに対して宣誓した誓いを破った」ことを指摘し，「パリ大学の立法権と講義停止権を認め」ている．学生は，聖職者と同様にみなされ，教会の庇護のもとに置かれ，世俗権力から守られるという特権が記されている．（しかし「学生であるふりをしているが，受業にも出ず，教師にもついていないものは，学生の特権を決して享受してはならない」ことも記されている.）[42] これは大学の「大憲章（マグナ・カルタ）」と呼ばれており，大学の権利を明確に示しているという点でも重要な文書である.[43]

この時までに大学は成立していたと考えられる．教会による裁判は都市による裁判よりも大学人に有利な判決が出ることが多いため，これは大学人にとっ

40　https://www.britannica.com/place/Italy/Institutional-reforms#ref318328
教皇アレクサンデルIII世（Alexander III, 位1159–1181）によって追認された.
41　「フィリップ尊厳王がパリの学生たちに与えた特権」, ハスキンズ,『大学の起源』, 166–170.
42　教会法学部では怠惰な学生が少なからず見られたようである．15Cには少なくとも週２回の正講義への出席が求められている．Cf. ラシュドール,『大学の起源・上』, 342.
43　ハスキンズ,『大学の起源』, 170–6. ジャック・ヴェルジュ『中世の大学』, 27.

ての大きな特権であった．騒動を教会の責任に任せることができたので，大学も町もこれを歓迎した．教授も学生も，教会に属すことで王の裁判から逃れられた．カペー朝もこれに賛同した．更に学生は――その中には聖職者もいたがそうでないものもいた――聖職者の特権を受けることができた．それには聖職者禄も含まれていた．大学の自律性，自由の制限はゆるやかなものであり，学生たちも，自らを教会に属するものとして受け入れた．

これらの文書から，パリ大学が12C後半までに形を整えていたことが窺われる．パリ大学という表現は1260年に初めて現れるのだが,[44] 教員たちの結社が最初に現れたのは1170–80年頃であり，教員と学生たちの共同体が1200–10年頃に生まれたと考えられている．

B. パリとボローニャで大学が始まった要因

ラシュドール（Hastings Rashdall, 1858–1924）がいうように「スコラ学の動きはパリで始まったものではなく，市民法の運動も，ボローニャに始まったものではなかった」[45] が，パリとボローニャが最初の大学都市となっていく．それにはどのような要因があったのだろうか．

経済的発展

ヨーロッパでは，９Cのフランク王国の分裂から衰退していた経済が，再び盛んになる.[46] 10C頃から農業技術が飛躍的に発展した．余剰生産物が生まれ，商取引が盛んになっていく．また11C末から始まる十字軍により地中海貿易が促進された．経済の発展により，生活水準が上がり，人口も増加していった．そして都市ができていく．パリもボローニャも交通の要所であった．

ギルドの形成

中世イタリアには自治権を獲得する都市（コムーネ）が生まれていった.[47]

44　池上俊一他,『都市から見るヨーロッパ史』（放送大学, 2021）, 138.

45　ラシュドール,『大学の起源・上』, 113.

46　カール大帝の死後，ヴェルダン条約（843）によって西フランク，東フランク，中部フランクへと分かれ，更にメルセン条約（870）で領土の変更が起こった．フランク王国の分裂はノルマン人の移動を招くことになった．

47　Cf. 児玉,『イタリアの中世大学』, 2.

都市では匿名性が高まり誘惑もある．教会は都市に批判的であった．しかし都市には魅力があった．地方にはない先進性，多様性，また自由があった．大学は都市で生まれていった．

都市では様々な職業が生まれた．同じ仕事をする人々が集まり，自分たちの益となるように自発的に共同体を形成していった．同職組合としてのギルドである.[48] ギルドでは，自発的な同意のもとに，徒弟，職人，親方という階級が生まれていった．ギルドの試験を経て次の階級へと進んでいくシステムができていく．また騎士階級では，小姓，従者，騎士という修行の段階があった．大学はヨーロッパに広がっていった知的ギルドであった．

法律知識の社会的ニーズ

新しく出現したコムーネにも，その中に生まれたギルドにも，法的な根拠が必要であった．この社会の変化は法学を必要とした．法学者たちは，ギルドに，古代の法律から根拠を見出し，ローマ時代の職業団体（collegium）から説明した．経済の発展と共に，公文書，契約文書のニーズが高まっていく．法の知識はよい職を得る手段となった．

法学関係者のギルドも盛んになっていった．ギルドは，自律性を持ち，領主から一定の自治権を得ていった．ギルドは，規約を持ち，独立した団体として，皆で議論し事柄を決めた．また権力者との交渉も行っていった．

叙任権闘争

法学研究を盛んにしたもう一つの理由は叙任権闘争であった．国家教会では国家（帝国）と教会が分かちがたく結び付く．教会と国家（帝国）の問題は４Cに遡る．これは最初のキリスト者ローマ皇帝コンスタンティヌス（Gaius Flavius Valerius Constantinus, 位306-337）から始まる問題であり，またテサロニケの暴動と虐殺（390）を行ったテオドシウス帝（Flavius Theodosius, 379-395）と彼に公的悔い改めを求めたミラノ司教アンブロシウス（Ambrosius, 位379-395）との緊張にも見ることができる．

48　11Cの北イタリアには石工のギルド的組織が見られる．イタリアにはarte, universitas, collegiumと呼ばれるギルドがあった．Ibid., 3.

カール大帝は教会の制度を用いて重要なポストを押さえフランク王国を統治した．教会と国家（帝国）が協調関係にある場合には問題は顕在化しないが，緊張が高まると，司教，修道院長といった聖職者の重要なポストへの任命権が大きな問題となる．任命を教皇（教会）が行うのか，皇帝（世俗権力）が行うのか．教皇グレゴリウス７世（位1073–85）が神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ４世（位1084–1106）を破門したことに端を発したいわゆる「カノッサの屈辱」（1076）は11Cにおける象徴的な出来事であった．

イタリアで自治都市が生まれていった背景には，世俗権力によって叙階された司教権への反発があった．[49]ローマ・カトリック教会の中心地であるイタリアで，人々は教会から独立したコムーネを求めていった．そして世俗的なボローニャ大学が生まれていったのである．

11C後半には，特にフランスとイタリアで，聖職者叙任権の法的論争が大きくなっていた．皇帝側も教皇側も，自らの正当性を主張するため，（帝政時代の）ローマ法，教会法に根拠を求めた．法的根拠を明らかにする研究が必要とされた．フランス，シャルトル司教のイヴォ（Ivo, 1040頃–1115）は教会法をまとめたことで知られている．その後にカノン法の父と呼ばれるようになるボローニャのカマルドリ会修道士グラティアヌス（Johannes Gratianus, [Gratian], d. 1160頃）が，聖書，教父文書，公会議資料，教皇勅書だけでなくローマ法も用い，教会法を体系的にまとめた.[50] 彼の「法令集（Decretum Gratiani）」（1140年頃）は長く大きな影響力を持った.[51] またイルネリウスを始めとするボ

49　ボローニャのコムーネ（自治都市）は，世俗権力による司教叙階への反発の中で，都市の有力者を中心に生まれてきた．児玉善仁,『イタリアの中世大学』, 2, 71.

50　グラティアヌスの時代には，パリと同様にボローニャでも神学が学ばれていた．しかし13Cになるとボローニャの神学教育は托鉢修道士の学校においてのみとなり，大学団や教師の組合との関係がなくなった．ラシュドール,『大学の起源・上』, 135–7.

51　11C末にはイタリアの法学者たちが「法律全集」（「ローマ法大全」の中の帝政時代の法学者の意見をまとめたもの）を論じ始めている．グラティアヌスの生涯についてはほとんどわかっていないが，「法令集」は大きな影響力を持ち，20Cまでカトリック教会法の基礎となる．3500から3800にわたる条文を基礎的条文と二次的条文を区別に分け再編成したことで，教会法が整理され，発展の基盤となった．ジャック・ヴェルジュ『中世の大学』14–

ローニャの法学者たちは，古代ローマの市民法を再編しまとめた「市民法大全」を完成させた．このようにしてボローニャで市民法と教会法という２つの普遍法が発展していき，ボローニャ法学の名声が高まった．この２つの普遍法の背景にあったのは皇帝と教皇という２つの普遍的権威であった.[52]

C. パリ大学を備えたもの

フランス人大学史研究者ディルセー（Stephen d'Irsay, 1894–1934）は，フランスでは知的関心から大学が生まれてきたとして以下のように記している．「イタリアやドイツでは，最も優れた知的エネルギーが，司教叙任権をめぐる政治・宗教的紛争に吸い取られていた」が，「フランスは，教養諸科や思弁的学問の静穏な祖国でありつづけた．そしてこれこそ，他の諸国よりもこの国で，大学が簇生した本質的な理由のひとつだったのである．」[53]

フランスには，シャルトル（Chartres），ラン（Laon），ランス（Reims），オルレアン（Orléans），トゥール（Tours）といった司教都市の優れた学校があった.[54] シャルトルではシャルトルのベルナルドゥス（Bernard de Chartres, d. 1130頃），ランではアンセルムス（Anselmus de Laon, d. 1117）が神学を教えていた．（アベラルドゥスも一時期アンセルムスのもとで学んでいる．）

パリは魅力的な町であった．12Cパリではノートルダム大聖堂の建築が始まっている(1163).[55] パリには附属学校で有名な３つの教会があった．大聖堂，

---

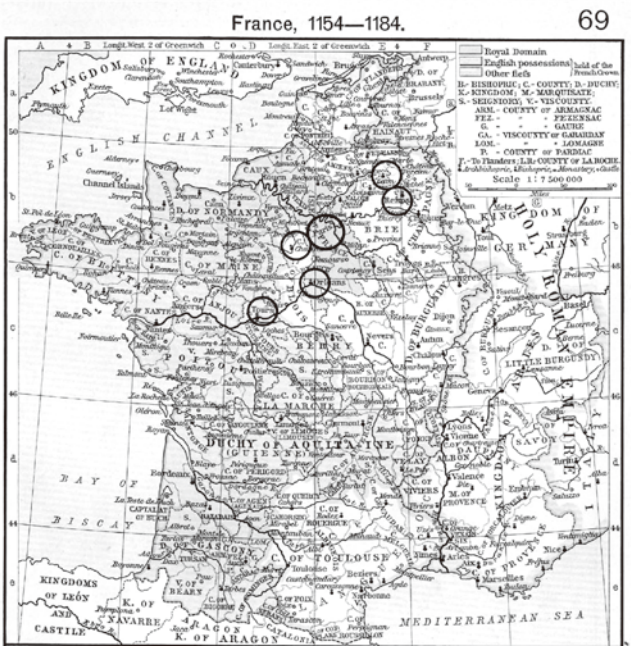
15. 児玉,『イタリアの中世大学』, 115–8. ラシュドール,『大学の起源・上』, 128–133.

52　ラシュドールは，市民法と教会法の関係を以下のように説明している．(1)市民法は教会法の源泉の一つである．(2)教会法は市民法を模倣して作られた．(3)権威の源泉を神聖ローマ皇帝に帰す市民法への反動として，教会法は同様の権威を教皇に帰すものとして立て上げられられた．ラシュドール,『大学の起源・上』, 133–5. このように考えると，パリ大学で教会法研究が大きく進まなかった理由の１つがわかる．教会法は市民法をもとに，キリスト教的法理解体系として構築されたため，市民法研究を禁じつつ行った教会法研究は発展できなかったのであろう．

53　ステファン・ディルセー ,『大学史・上』, 池端次郎訳,（東洋出版社, 1988）, 62.

54　地図は以下のリンクから用いた．
https://maps.lib.utexas.edu/maps/historical/shepherd_1911/shepherd-c-069.jpg
Shepherd, William R. 1911. "France, 1154-1184," *Historical Atlas.*, 69.

55　ヴェルジェ ,『中世の大学』, 22–23. ノートルダム附属学校の発展にはアベラルドゥスが



サント・ジュヌヴェイーヴ教会，そしてサン・ヴィクトル教会である[56]この中で最も重要なのはギヨーム・ド・シャンポー（Guillaume de Champeaux［William of Champeaux］, 1070頃–1121）が教え，その後に彼の弟子で論敵となったペトルス・アベラルドゥス（Petrus Abaelardus［ピエール・アベラール］, 1079–1142）が教えた大聖堂附属学校である．これがパリ大学へと発展していった.[57] アベラルドゥスは弁証学（論理学）や合理的神学を教えたのだが，非常に多くの学生が集っていた．アベラルドゥスは1115年前後に教え始めたよ

寄与した. 1150年以降は衰退したようだが，サント・ジュヌヴィエーヴ（Saint-Genevieve），サン・ヴィクトル（Saint-Victor）の学校も繁栄した．https://mapsontheweb.zoom-maps.com/post/625514040372969472/map-of-paris-in-year-1300
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Plan_de_Paris_vers_1300-1330_-_ALPAGE.svg

56　サン・ヴィクトルはギヨームが引退後に学校を開いた．フーゴ（d. 1142）やリカルドゥス（1110頃–73）もここで教えた．

57　ラシュドール,『大学の起源・上』, 237–239.

うであるが，彼はその頃から始まったエロイーズとの恋愛でも知られることになる．彼はその強い性格や激しい批判的論争で，1140年に受ける異端宣告も含めて，波乱に満ちた生涯を送るのであるが，学生への人気は常に高かった．彼はこの時代の優れた都市学校職業教師の一つの典型であったといえよう.[58]

ラシュドールはアベラルドゥスを高く評価している．アベラルドゥスこそがスコラ神学の「真の確立者」であり，「大学が生起する元の知的運動は，アベラルドゥスによって，開始された」という．彼はパリ大学の「知的始祖」であったともいう．

> 彼［アベラルドゥス］の始めた問い方，教え方――彼によって，哲学から神学，さらには（多かれ少なかれ）中世学問の全分野にまで及ぼされた，あのやり方――は，中世大学の授業を本質的に性格づけた方法であった．アベラルドゥスは，外的組織の点から見ても，ある意味で大学運動を開始した，と言えるだろう.[59]

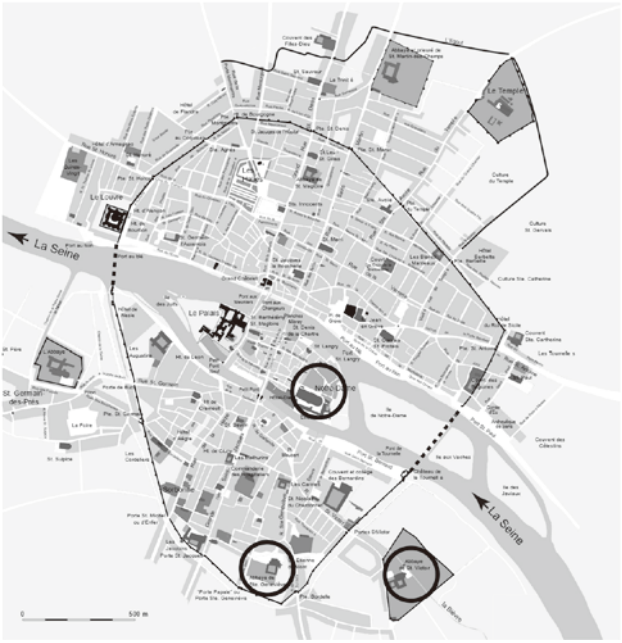
12Cにはヨーロッパ全土から学徒たちが優れた教師を求めて遍歴していた．これが当時の時代精神であった．この頃までにパリは神学の国際センターとなっていた．パリは都会であり，学生たちを受け入れる施設も十分にあった．ヨーロッパのどこから来てもラテン語という共通語で学ぶことができた．

外国から来た学生たちは自衛と相互扶助のために，ギルドを作った．それがウニウェルシタス（universitas）である．パリ大学はそのようにして始まっていった．

この時代のカトリック教会はカタリ派，ワルドー派といった異端の問題に頭

58　以下の柏木氏のコメントは興味深い．「アベラールは、十二世紀に登場した都市の学校の教師である。修道院がまだ学問の場であった十一世紀、カンタベリーのアンセルムスは、内的省察と観想に沈潜していた。学問の場が大学になる十三世紀のトマス・アクィナスは、教養過程でギリシアとイスラームという異教の理論体系を学んできた学生との演習で、いかなる問題をもただちに弁証してみせなければならない大学教授であった。十二世紀には学問の場は都市の巷で、アベラールは他校と競合しながら、月謝をとって弁証論の技を見せる職業教師である。この風土の相違は、中世を代表する３人の思想家の叙述形式にも反映している。」柏木英彦,『アベラール：言語と思惟』（創文社, 1985）, 12–3.

59　ラシュドール,『大学の起源・上』, 66.



を悩ませており，優れた神学者たちによる正統な信仰の神学的擁護と優れた聖職者たちによる伝道を必要としていた．パリ大学神学部はこのためにも重要であった．カトリック教会におけるパリ大学の神学研究・教育のステータスが上がっていき，教義の決定にも関わるようになっていった．教皇はパリ大学神学部を直接的影響下に置いておくことで，教義の問題をパリの神学者たちに扱わせることができ，また神学者，聖職者への高度な教育を行うことができると考えた.[60] 教皇にとって，パリ大学が果たすべき役割はローマ・カトリック教会のための適切な教育であった．

パリ大学（神学）とボローニャ大学（法学）で学んだ教皇インノケンティウス３世（Innocentius III, 位1198–1216）はパリ大学に神学，法学，医学の教授

60　Peter R. McKeon, “*Concilium Generale and Studium Generale*: The Transformation of Doctrinal Regulation in the Middle Ages,” *Church History* 35 no. 1, (Mar 1966), 30.

免許を与えた．[61]それに続く教皇ホノリウス３世（Honorius III，位1216–27）もこの時代に新たに生まれた高等教育に非常に強い関心を持っていた．彼は，パリ大学だけでなくボローニャ大学も含め，生れてくる高等教育機関に教皇庁の強い影響をもたらそうとしていた．ボローニャ大学においては，教会は教授免許を授与の権限がなかったのであるが，ホノリウス３世は1219年の教書で，ボローニャでも教授免許を与える権限を，いわば力技的に付与している.[62]

学問の自由という観点から重要なのは，ホノリウス３世が，教勅 “Super specula Domini”（1219）においてパリ大学における市民法の教授を禁じていることである．これは，世俗の学問を否定するという意図からではなく，聖職者が世俗的な学びを超えて神学・教会法を真剣に学ぶために，という意図で出されたものである．彼はまた同様の意図で，聖職者が医学を学ぶことも禁じた.[63]パリ大学は聖職者のための神学研究・教育の中心地となる必要があったのである．おそらく彼は，パリ大学を神学と教会法の大学として，ボローニャ大学を

61　インノケンティウス３世は1207年に教区外で学ぶ聖職者に聖職禄が与えられることを定めた．児玉,『イタリアの中世大学』, 114.「パリ大学にたいするグレゴリウス９世の大勅書」ハスキンズ,『大学の起源』, 172-3. ラシュドール,『大学の起源・上』, 339–372.

62　聖職者教育の重要さを認識していた教皇ホノリウス３世（Honorius III，位1216–27）は教勅 “Super specula Domini”（1219）で，才能のある若者が神学教育を受け，自分の教区で教えることを記している．ボローニャの前助祭長であった彼はまたボローニャの助祭長に対して，教授職につく者には資格（licentia docendi）が必要であり，学位（doctor）の栄誉を貶めてはならないことを記している（1219. 6. 8付）．児玉,『イタリアの中世大学』, 43. この教書が意味することは，それまでボローニャにおいては，教師たちがかなり自由に教授資格を与えていたということである．しかしこの勅書によってボローニャ大学は教会制度の中に入っていくことになる．この改革は大きな反対なく受け入れられたようであるが，その理由としてラシュドールは，「ボローニャの著名な教会法学者グラーティア・アレティーヌス（Gratia Aretinus）が助祭長の地位にいた」ということをあげている．ラシュドール,『大学の起源・上』, 197–8.

63　ディルセー『大学史・上』, 89. 児玉善仁,『イタリアの中世大学』, 139–141. Peter R. McKeon, “Concilium Generale and Studium Generale: The Transformation of Doctrinal Regulation in the Middle Ages,” *Church History* 35 no. 1, (Mar 1966), 28.「1207年までにインノケンティウスIIIは神学教師の数を８人までと定め，1219年までにホノリウスIIIはパリ大学で市民法（ローマ法, civil law）の研究を禁じた.」

法学の大学として，そしてモンペリエ大学（ホロニウス３世が1220年に枢機卿Conrad of Urachを用いて設立）を医学の大学として，教皇庁の指導のもとに整えようとしていたのであろう.[64]

教会は，学生を聖職者と見なそうとした．そして学生は教会の庇護のもとに入っていく．1200年フィリップII世（尊厳王）が与えた特許状により，学生が教会裁判を受けることができるようになった.

教皇も皇帝も，また後には王も，大学の存在を好意的に受け止めていた．13Cの教皇は大学の発展を歓迎している．教皇庁に直結した教育機関・研究機関は好ましいものと考え，援助を与えている.

教員と学生のギルドとしての大学

学ぶ場としての大学を指す言葉としては，ストゥディウム（stadium）が用いられていたが，教師と学生の職業的ギルトとしてのウニウェルシタス（universitas）が大学を意味する実体になっていく．ウニウェルシタスやコレギウムといった言葉は，組合等の団体を意味する一般的な言葉であった.

ボローニャではウニウェルシタスは学生の組合として始まり（universitas scholarium），後に学生と教師の組合となっていく．パリでは，教師の組合ができ，それに学生が加わっていく教師と学生の団体（universitas magistrorum et scholarium）であった.

徒弟，職人，親方という商工業ギルドの区分は，大学においては，学生，バチェラー（学位未取得の見習い教師, baccalarius），教師（ドクター /マスター）という修学の段階として整えられていく.[65]（この他に学位試験には合格したが，高価な入会儀式が要求された組合に入っていない免許取得者，リケンティアトゥス［licentiatusm］もいた.）

教師はドクターあるいはマスターと呼ばれた．今日では，ドクターはマスターの上位にあるが，初期の大学においてはこれらは同義語であった．ラテン

64　ヘイスティングス・ラシュドール,『大学の起源・中』横尾装英訳,（東洋館出版社,, 1970）, 123.

65　横尾,『大学の誕生と変貌』, 38-43.

語の「教える（doceo）」という語から，教える人がドクター（doctor）であった．イタリアでは教師はドクターと呼ばれ，マスターとよばれることは少なかった．パリでははじめ神学，医学，教養学の教師はマスターと呼ばれ，法学教師はドクターと呼ばれていたが，次第に神学部，法学部，医学部の教師はドクターと呼ばれるようになり，教養学部の教師はマスターと呼ばれるようになった．

パリの教師ギルドは1208年までに規約が成文化され，ボローニャの教師ギルドも1219年までに整えられていた．ドクターあるいはマスターと呼ばれる学位が教師ギルドによって認定され，大学教師の教授資格となっていく．学位を持っていないものは大学で教えることができなくなった．[66]

大学によって，まだ時代によって，学位取得のための修学年数は変わっている．1215年のパリ大学の規約（教皇使節ロベール・ド・クールソンの規約）では，教養学の教師になるために６年，神学部の教師になるためには８年（サン・マルタンの枢機卿とサン・マルクの枢機卿による規約［1366］では神学部の教師になるには16年）の修学が求められた．ボローニャでは市民法の教師になるために７−８年，教会法では６年が必要であった.[67]

大学の教師（ドクター /マスター）になるための学位取得には２つの試験が要求された．第一は個人試験（リケンティア［licentia］）であった．これが実質的な試験であった.[68] この試験に合格した者（ドクターとなる資格を得た者）

66　横尾,『大学の誕生と変貌』, 34–8．アベラルドゥスは教養学の教師としては認められていたが，彼が神学（エゼキエル書）を講じた時激しい批判を受けた．それは彼が神学教師としての資格がなかったためと推測される．

67　横尾,『大学の誕生と変貌』, 37–8．Cf. ラシュドール,『大学の起源・上』, 343–7, 356, 361–2.

68　ラシュドールは，助祭長がボローニャ大学を統括するようになった（すなわち教皇ホノリウス３世がボローニャ大学での教授免許付与の権限をボローニャの助祭長に与える1219年）以降のこととして，リケンティアについて以下のように記している．受験許可のために，国民団の代議員を伴って学頭への挨拶と宣誓．試験前の８日以内に教授を伴って助祭長（教会の代表者）への挨拶．試験の当日，早朝ミサに出た後に，カレッジの前で，教授の１人から法学の２つの箇所が指定される．自宅に戻り準備した後に，それらの箇所

はリケンティアトゥス［licentiatusm］と呼ばれた．

第二は公開試験（ボローニャではコンベントゥス［conventus］，パリではインケプティオ［inceptio］）であった．これは形式的なものであり，ギルドの公的な認証式といってよい．ギルドの親方になるためには、人々の前で公に能力が認められる必要があった。大学教師として認められるためには、知識と教える能力が人々の前で示される必要があった。候補者は大勢の人々の前で自分の説を講義した．そしてあらかじめ用意されていた反対者を前に自説を展開した.[69]

正式な教師（ドクター /マスター）となる前の段階が作られた．バチェラー（baccalarius）である．彼らは，正式な学位取得前に，教える機会を与えられつつ学ぶ者たちであった．いわば，親方となる前の職人のようなものである．パリ大学でのバチェラーの最初の記録は，神学部で1231年，教養学部で1245年である．バチェラーとなるための試験があった．パリ大学で教養学部のバチェラーになるには，予備試験（responsio）として文法と論理学についての教師との討論で満足の行く結果を出さなければならなかった．その後にバチェラー試験（Examen Baccalariandorum）が行われた．３つの審査に合格する必要があった．それらは，パリにおける必要期間の滞在と規定講義への出席記録の確認（書類審査），教科書の内容についての試験，そして討論裁定（determination）の試験であった．これは学生たちの討論を導く能力のことである．バチェラーになると無給での特殊講義（午後に行われた）を行うことが許された．

神学部の教師になる道は教養学部教師よりも長く，神学部では３段階のバチェラーがあった．聖書正講義バチェラー（biblicus ordnarius)/聖書速修バチェラー（cursor），命題集バチェラー（sententiarius），そして上級バチェラー

について講義/解説する．教授の２人が主な質問をし，他の教授たちも質問をする．その後，教授たちの過半数によって合否が決まり，助祭長に報告された．ラシュドール，『大学の起源・上』, 199-201.

69　横尾，『大学の誕生と変貌』, 33. ラシュドール，『大学の起源・上』, 201-203.

（baccalarius formatus）であった.[70]

バチェラーは次第に下級学位として認められるようになったが，チャンセラーが授与した正式な学位ではなかった．リケンティアトゥスとドクター /マスターだけが正式な教師の学位であった．このように大学は教員と学生のギルドであり，そこにおいて，学生，バチェラー，教師（ドクター /マスター）という 3 つの階層ができていった.

D. ボローニャ大学の始まりと組織

イタリアにおけるローマ法の復興と共に，この時代の団体はローマ法の中で位置づけられていた．大学も例外ではなかった.

ボローニャには著名な法学の教師がおり，ヨーロッパ各地から学生たちが集まってきていた．11C後半にペポ（Pepo, 生没年不詳）が，その後イルネリウス（Irnerius, 1055頃-1130頃）が，市民法を教えていた.[71] 彼らはしばしばボローニャ大学の最初の教師として論じられる．また教会法学者のグラティアヌスもボローニャにいた．彼らがボローニャ法学の名声を高めていた.

コンソルティア，ソキエタス，ナチオ，ウニウェルシタス，そしてコレギウム[72]

学生は優れた教師を求め，教師と個人的契約を結び教育を受けたのだが，これは商業など他の分野と同じ契約関係であった．ボローニャ以外から来た学生たちが多くいたが，彼らには法的保護が無かった．中世のボローニャでは市民権のもつ意味は大きく，持たないものは大きな不利益を被ることがあった．もし彼らが団体を作ることなく，外国であるボローニャに住んだならば，非常に

70　ラシュドール，『大学の起源・上』, 350-365．横尾，『大学の誕生と変貌』, 38-43.

71 「ペポという教師が自らの権威で法学を教え始めたが、彼の知識がいかなるものであったとしても、なんら名声を得なかった。他方で、教師イルネリウスは、ボローニャで教養諸学を教えていたが、法学書が[ラヴェンナからボローニャに]もたらされた時に、その法学書を自分で学び始め、学びつつ教え始めた。そして、きわめて著名となり、法学の最初の啓蒙家となった。」ボローニャ大学教師オドフレドゥスによる記述（13C前半）．児玉，『イタリアの中世大学』, 33. 以下も参照せよ．Ibid., 13-4, 32, 36, 115-6.

72　児玉善仁，『イタリアの中世大学』, 47-81. このセクションは児玉の考察に多くを負っている.

困難な生活を強いられたと考えられる.[73] 彼らは，**コンソルティア**（**consortia**）という互相互扶助，自衛のための仲間の団体を作った．そして家賃の交渉，食料品購入の交渉，図書の値段の交渉といった町の人々との交渉や，教師との交渉を行うようになった．学生は仲間と家を借り一緒に住むことが多かった.[74] これは都市によって正式に認められた団体ではなかった．またボローニャ出身の学生はこれに入ることはできなかった.

大学団へと発展していくこのギルドは，ボローニャの学生が作ったものではなく，外国人学生が必要を感じて作り，それがボローニャ出身の学生にも何らかの権威を持つようになっていったのである.

また**ソキエタス**（**societas**）という，教授契約関係に基づいた教師と学生の共同体が生まれていった．学生はボローニャに来る前に教師に手紙を書き教授を依頼し，教師はそれに応じる．父親が手紙を書くこともあった．中世に手紙を書くことができる人は多くなかった.[75] そしてボローニャに来た時に個別に契約を結んだ.[76] 古代ギリシアのソフィストや古代ローマの雄弁家への教授依頼をイメージするとよい．ソキエタスは，ギルドの親方と職人そして徒弟の関係と同様，暖かい交わりがあった．ソキエタスは，契約に基づいた共同体であると同時に互いの関係と誠実さを重んじた家族的共同体であった．ソキエタスは法人格も共同財産も持たなかった.

12C末には，コンソルティアとソキエタスが消滅していく．コンソルティアは，ボローニャ出身以外のすべての学生のための団体であったが，次第にいくつもの**ナチオ**（**natio**, **国民団**）が生まれ，取って代わっていくようになる．同

73　ラシュドール，『大学の起源・上』, 150.

74　ラシュドール，『大学の起源・上』, 177.

75　横尾『中世大学都市への旅』, 22. 中世に「文字を書ける人はほとんどおらず，手紙が書ける人は更に少なく，中世に多くはなく，職業的書記者や公証人は中世の文書通信の多くを担っており，手紙の作成に集中していた.」Charles H. Haskins, “The Life of Medieval Students as illustrated by their Letters.” *The American Historical Review*, vol. 3, no. 2, (January, 1898), 203-4.

76　児玉善仁,『イタリアの中世大学』, 86.

じ言語を母語とする同邦団体であり，より地域性の強い団体である．ナチオは，教育活動には関わらない生活援助団体という点ではコンソルティアと同じであるが，代表者を選出し，[77] 法的権限を持ち，学生の保護および処罰も行う法人団体となっていく．[78] 1265年にはアルプス以北の13のナチオ，そしてアルプス以南の３のナチオが形成されていた．[79]

アルプス以北の学生のナチオとアルプス以南の学生のナチオ，これらの２種類のナチオの連合から２つの**ウニウェルシタス**（**universitas**, **大学団**）が形成されていくことになる．すなわちアルプス以北ウニウェルシタス（universitas ultramontanorum），アルプス以南ウニウェルシタス（universitas citramontanorum）である．これらは学生団体であった．それぞれに学頭（rector）がいた．[80] ウニウェルシタスは国民団の上にある連合組織であった．

興味深いことであるが，これらは法学の学生のみのものであり，他の分野の学生も，そして重要なことに，教員たちも含まれていなかった．[81] ボローニャ大学は，法学の外国人学生ウニウェルシタスとして，12C最後の25年の内に始まっていったのである．[82]

ナチオとウニウェルシタスの違いは以下の２つである．第一に，ウニウェルシタスは，地方的性格の様々な国民団を統合する普遍性（universalitas）を

77　国民団の代表者はプロクラトール（ドイツ国民団），コンシリアリウス（その他の国民団）と呼ばれた．

78　ラシュドール，『大学の起源・上』, 101, 152, 154. 唯一規約が現存している14Cのドイツ国民団の規約は全34章からなり，その目的として以下のように記されている．「友愛と相互の団結と友好の涵養，傷病者の支援，葬儀の執行と怨恨敵対の絶滅，成員の学位取得志願者の試験場への保護送迎，成員の精神的利益」. 児玉善仁,『イタリアの中世大学』, 57–60.

79　アルプス以北の13国民団：フランス人，スペイン人，プロヴァンス人，イギリス人，ピカルディ人，ブルゴーニュ人，ポワトゥ人，トゥール人とマンヌ人，ノルマン人，カタロニア人，ハンガリー人，ポーランド人，ドイツ人．アルプス以南の３つの国民団：ローマ人（含：カンパーニア人ないし南部人），トスカナ人，ロンバルディア人．児玉善仁,『イタリアの中世大学』, 61, 34註（40）. ラシュドール，『大学の起源・上』, 150-153.

80　Rashdall, *The Universities of Europe in the Middle Ages*, 156.

81　児玉善仁,『イタリアの中世大学』, 62.

82　ラシュドール，『大学の起源・上』, 155.

持った．第二に，ウニウェルシタスは学生の生活相互援助だけでなく，ソキエタスが持っていたアカデミックな内容，教授契約も含み，相互扶助と自治のための団体となった．パリではギルドの親方としての教授に属していた権利がボローニャの教授たちには認められていなかった．徒弟であるはずの学生たちの団体（universitas）が，自分たちに教授する教員の採用まで決めていた．

ボローニャでは，パリと比べ，年齢が高く裕福で社会的身分の高い（そして中には既に仕事もしていた）者たちが学生として集まってきていたようである．そのためこのように強い学生団が形成され，教師よりも強い立場を持っていたのだと考えられる.[83] たとえば，教師は講義の時間厳守が求められ，講義への遅刻や時間超過には罰金が課せられた．休講するためには学生，学頭，代議員から許可を得なければならなかったし，ボローニャの町を離れる場合には帰ってくる約束として保証金を払う必要があった.[84]

ボローニャにおいて教員を含まない学生ウニウェルシタスが生まれてきたのはなぜだろうか．12C末以前からボローニャの教師たちは（ボローニャに限ったことではないが），より良い条件の他の地域の学校に移っている．自由な移動は当時の時代精神であった．コムーネは他の町で教えないという宣誓を教師に要求するようになってきた．教師たちはボローニャ市民でもあり，それに応じた.[85] その結果，教師と市の権力との結びつきが強まっていく．そして徐々に教師・コムーネvs.学生という構図ができあがっていく．フリードリヒ１世の「ハビタ」によって学生に与えられた裁判の選択権（市当局によってではなく教授たちや司教によって裁かれる選択権）が意味をなさなくなってくる．そ

83　教授たちは「古代ギリシアのソフィスト、古代ローマの弁論家に似て――単なる私的起業家としての教師にすぎず、そうしたかれらを、十七歳から四十歳に及ぶあらゆる年齢の一人前の紳士群が、受講のために傭ったのであった。かれら学生の多くは，僧侶であったとして，その大半はすでに聖職禄をもっていた.」ラシュドール，『大学の起源・上』, 147.

84　ラシュドール，『大学の起源・上』, 179–80, 187–9, 194. 都市の規則としても，聴講生が，午前に教授によって行われた正講義（ordinaria）で５人，午後に行われた特殊講義（extraordinaria）で３人に満たない場合には欠勤扱いとされ，罰金が課せられた．

85　市条例によって1227–1312には，ボローニャで教えるすべての教授に，ボローニャ以外では教えないという宣誓が強制された．ラシュドール，『大学の起源・上』, 161.

のため，学生たちは，教員から独立した，国民団よりも強力な総合的団体を求めたのであろう．そして教育的要素を持っていたソキエタスが解消され，学生の相互扶助と教育の両方を含んで統制する団体，ウニウェルシタスが必要とされたと推測される.[86]

当然のことながら，教師たちもコムーネも，学生が教師よりも強い立場を持つことを快くは思わなかったが，これを止めることはできなかった．その大きな理由はボローニャが世俗の学校であったことにある．世俗の世界は，教育も含めて，マーケットの原則に支配される．ボローニャの教育は内容も教師も世俗であった．ボローニャの教育は主に市民法であったため，教会権力も介入しづらかった．ボローニャの教師たちの多くは聖職者ではなく聖職禄がないため，学生からの授業料が重要な収入であった．学生たちは，授業料支払いによって，教育を受ける権利を主張することができ，強い立場にあったのである．

ボローニャでは学生の団体が先行したのであるが，教師たちもまた団体を形成した．**コレギウム**（**collegium**）である．ウニウェルシタスが法学の学生によってのみ構成されたように，コレギウム（collegium）も法学（市民法・教会法）の教師・学位取得者だけによって構成されていた.[87] ボローニャは法学の学校であったのである．

経済的に学生の授業料に支えられていた教師たちが持っていた優位性は学業認定（学位授与）であった.[88] 教師たちは，13C前半までに，学位授与団体としてコレギウムを形成した．市民法学者のコレギウムと，そして教会法学者のコ

86　児玉善仁,『イタリアの中世大学』, 67–71を参照.

87　Rashdall, *The Universities of Europe in the Middle Ages*, 147, 233. ボローニャで教師の団体の最も古い記録は1215年であるが，そこではウニウェルシタスという言葉が用いられている．「市民法と教会法の教授たちのウニウェルシタスと大勢の他の教師と学生（学者）の前で」新著が朗読されたという．ここでのウニウェルシタスは単数形であり，この時代は市民法と教会法の教師たちが 1 つのウニウェルシタスを形成していたことを窺わせる．“coram universitate professorum iuris canonici et civilis et aliorum doctorum et scolarium multitudine numerosa”. Rashdall, *The University of Europe in the Middle Ages*, vol. 1, 148.

88　児玉善仁,『イタリアの中世大学』, 76.

レギウムが形成されていった.[89] ボローニャにおけるこれらのコレギウムは，学位授与団体として始まった.[90] どの職業ギルドにおいても，加入希望者の資格を審査する権利があった．教師のギルドは志願者を審査した．前述のように，個人試験が行われ，公開試験が行われた．この両方に合格して初めて教員のギルド（collegium）に入ることができた.[91]

ボローニャ大学の教師の報酬は学生からの授業料に限定されていたが，1280年以降，ボローニャ市が教員給与の支払いを始めていく.[92] 他の都市が高名な教師をよい条件でヘッドハンティングしていくことに，遅ればせながら対応したのである．教師の任命権は徐々に都市に移っていく．

Ⅲ．ストゥディウム・ゲネラーレ

大学はウニウェルシタス（universitas）と呼ばれ，それが英語のuniversityにつながっていく．大学を表したもう一つの言葉はストゥディウム・ゲネラーレ（studium generale）であった．ストゥディウムは学校を意味する言葉であったが，ストゥディウム・ゲネラーレは高度な教育機関を表す言葉として用

89　Ibid., 100. ボローニャにおけるコレギウムの加入資格は「父祖にまでさかのぼるボローニャ市民で，このコレギウムで教授免許とドクトル学位を取得していること」であった．したがってそれは「地方的組織」であり，「ボローニャ人の学位取得者による学位授与団体」に他ならなかった．そしてコレギウムには，13Cまでは現職の教師だけでなく，教師ではない学位取得者も参加していた．Ibid., 102–3, 107.

90　コレギウムは学位を与えることしかできず，教員採用の契約権はウニウェルシタスにあった．教員資格の認定権はコレギウムにあったが，教員採用権は学生たちのウニウェルシタスが握っていた．またこれらとは別に，法学を学び学位を取得した者たちによる法律家の職業組合（学位取得者と裁判官と法律家の組合［collegia dei dottori, giudici e avvocati］）も13C後半に生まれている．児玉善仁,『イタリアの中世大学』, 79.

91　ラシュドール,『大学の起源・上』, 199–203.

92　パドヴァにあったウニウェルシタスがヴェルチェッリに移動したときの契約（1228）がその始まりであった．児玉善仁,『イタリアの中世大学』, 105, 111.ラシュドール,『大学の起源・上』, 190. ボローニャ大学では1280年のスペインの教会法学者ガルシアス（Garsias）が最初の記録である．最初のヘッドハンティングから約50年が経っている．

いられるようになった.[93] ウニウェルシタスが，学生や教員の団体を意味したのに対し，13C以降ストゥディウムは教育機関としての大学を意味した.

大学としてのストゥディウムには二種類ある．ストゥディウム・ゲネラーレとストゥディウム・パルティクラーレ（stadium particulare）である．ストゥディウム・パルティクラーレとは，特定の地域（particulare）からの学生が学ぶところであり，特定の地域の益となるような教育がなされた．主に教養科目が教えられる地方大学を指した.

ストゥディウム・ゲネラーレは高度な教育・研究が行われている大学を意味した.[94] その特徴は，特定の地域からだけでなくヨーロッパ全体（generale）から学生が集まり学ぶことができ，ヨーロッパ全体にその卒業資格が認められること，そして上級の学問（神学，法学，医学）が1つ以上教えられていること，かなりの数の教員がそれ（ら）を教えていることであった．初期にはストゥディウム・ゲネラーレという公式な資格認定があったというわけではなく，広く権威を認められた慣習的名称であり，いわば「一流大学」といったものであった.

ストゥディウム・ゲネラーレの学位はヨーロッパ全体（generale）で認められる学位であった．ストゥディウム・ゲネラーレの教師組合に受け入れられた教師はヨーロッパ全体で認められた．彼らは，それに劣る大学で教える資格があると考えられた．逆に他の大学の教師がストゥディウム・ゲネラーレで教えるためには試験が課せられた.[95]

93　Studiumは12C以前には教育機関を意味せず，学問，知識，学問をすることを意味していたが，12C末から教育機関を意味するようになった．児玉善仁，「Studium generaleの概念―その普遍性と法的根拠をめぐって―」,『イタリア学会誌』25,（1977）, 134.

94　Studium generaleの最初の記録は1233–34年のフランシスコ派修道士の文書であり，インノケンティウス4世が1244–45年に用いているが，13C後半になって広く用いられるようになったという．児玉,「Studium generaleの概念」, 134. 児玉『イタリアの中世大学』, 111. フランシスコ会の修道士は，ヴェルチェッリの大学がストゥディウム・ゲネラーレであると述べている.

95　13C初頭にストゥディウム・ゲネラーレと考えられていたのは以下の4つであった．すなわちパリ（神学と教養諸科），ボローニャ（法学），そしてサレルノ（医学），そしてオッ

13C以降，新たに生まれた大学は，当然のことながらストゥディウム・ゲネラーレの地位を求めた．ストゥディウム・ゲネラーレの教師たちが教えた自称ストゥディウム・ゲネラーレが生まれていった．

ストゥディウム・ゲネラーレは制度化されていった．ヨーロッパにおける二つの大きな権威はローマ教皇と皇帝である．彼らがストゥディウム・ゲネラーレを認可あるいは設立していくようになる．

万国教授資格

司教座聖堂付属学校における教授免許（licentia docendi）の授与権は，1160年頃までに司教座聖堂に与えられていた特権である．彼らが管轄教区のふさわしい教師に教授資格を授与していた．シャルトル，ランス，オルレアン，トゥール，パリといった司教座聖堂学校で教えるためにはこの資格が必要であった．教授免許の有効性はそれを発行した教区内に限られていた.[96]

パリの司教座聖堂学校が母体となってパリ大学が生まれていくのであるが，司教座聖堂の文書局長（カンケラリウス）が，司教座聖堂附属学校の教授資格と同様に，しばらくの間大学の教授資格を管理していた．カンケラリウスは，大学を自らの支配下に置きたいと考えていたが，大学は司教区の枠を超え，ストゥディウム・ゲネラーレとして国際的により大きな存在となっていくことを求めていた．

カンケラリウスが持っていた教区の教授免許授与権は，もともと司教座聖堂学校で教えるための資格を与えるものであった．したがってそれは教養諸学教授のための資格であった．教皇インノケンティウス３世は当初，教養学部の教授免許はカンケラリウスに引き続き認めつつ，上級の専門教育の教授免許は大

クスフォード（神学）であった. Rashdall, *The Universities of Europe in the Middle Ages*, 9. ラシュドール，『大学の起源・上』, 41. ラシュドール，『大学の起源・中』, 10. 児玉，「Studium generaleの 概 念」, 135. A.B. Cobban, *The Medieval Universities: Their Development and Organization*, (London), 25. 横尾，『中世大学都市への旅』, 230–236.

96　カンケラリウスが試験を行い，司教区内での教授資格（リケンティア・ドケンティ［licentia docendi］）を与えた.

学団に与えていたようである.[97]

慣習的にパリとボローニャというストゥディウム・ゲネラーレに認められていた万国教授権（ius ubique docendi，試験を受けることなく全ての大学で教える権利）が次第に制度化されていく．1292年，教皇ニコラウス４世（Nicholaus IV, 位1288–92）が「教授免許授与権」をパリ大学に出し，パリ大学での学位取得者は更なる試験や規制なしに「パリの外のどこででも教える権限を今後与える」と定めた.[98] 万国教授資格は教皇あるいは皇帝によって与えられる特権となっていった.[99] 13Cには教皇あるいは皇帝がストゥディウム・ゲネラーレを認可あるいは設立するようになっていくのであるが，それによって教区の教授資格に関する特権は失われていくことになる.[100] 教皇あるいは皇帝が万国教授免許（licentia ubique docendi）授与権を大学に与えるものとなっていった.[101]

97　1213年のインノケンティウス３世の教書では，「パリの教師たちが免許授与を承認した場合にはカンケラリウスはそれを拒否できない」とされている．児玉，『イタリアの中世大学』, 137. その一方で，教皇グレゴリウス９世の大勅書 “Parens scientiarum”（諸学の親）（1231）ではカンケラリウスの教授免許授与が記されている．(II.A. 大学の始まりを参照.)

98　ハスキンズ,『大学の起源』, 177–8.

99　ストゥディウム・ゲネラーレと万国教授免許の関係については研究者の間でも意見の相違がある．13C以降は教皇あるいは皇帝が万国教授免許授与権を認可することによってストゥディウム・ゲネラーレと認められるようになったと考える研究者もいる．またストゥディウム・パルティクラーレにも万国教授免許授与権が与えられたと考える研究者もいる．更に，教皇，皇帝だけでなく，王によって設立された大学も（普遍性は王国内に限定されるが）ストゥディウム・ゲネラーレであると考える研究者もいる．児玉，「Studium generaleの概念」, 138–140.

100 パリにおけるカンケラリウスの教授資格認可の権利は実質的に1213年に失われ，1219年大学には完全に大学に移された．（インノケンティウス３世の教書, 1213.）パリとボローニャとでは状況が異なっていたが（ボローニャでは教授免許授与の資格は教会になかった），パリにおいてもボローニャにおいても1219年に学位を授与する権利が大学に与えられた．松浦正博,「教授免許」,『大学辞典』児玉善仁, 赤羽良一, 岡山茂他編,（平凡社, 2019）, 361. 児玉,『イタリアの中世大学』, 137, 註46.

101 パリ大学とボローニャ大学で学んだ教皇グレゴリウス９世トゥールーズに認めた万国教授免許授与権が，非慣習的に規定され授与された最初の例であり，パリ大学の強い抵抗にあったという．児玉,「Studium generaleの概念」, 138.

まとめ

大学は中世ヨーロッパに生まれた．経済的発展と都市の勃興，ギルドの発展，自由な移動の雰囲気とそれを可能にする社会的状況があった．教会的，学術的共通語としてのラテン語があり，またそれまでの知的伝統（自由七科）の継承と発展があった．そして12Cルネサンスによる飛躍的な学術的発展があった．既に存在していた諸学校（キリスト教的な宮廷学校，修道院付属学校，大聖堂付属学校と，世俗の法学校，医学校）と優れた教師たちが全ヨーロッパから学生たちを惹きつけていた．

パリの司教座聖堂付属学校からパリ大学が生まれた．またボローニャの諸法学校からボローニャ大学が生まれていった．パリ大学は神学教師のギルドを中心として始まった．教会法と医学も教えられたが，市民法研究はホノリウス３世によって禁じられた．市民法から離れた教会法研究はあまり発展しなかった．また医学においても他の優れた医学部（モンペリエ，サレルノ）のような評判を得るには至らなかった．パリは圧倒的に神学の大学であった.[102] 同様に，ボローニャ大学では，医学も，そしてしばらく後には神学も教えられていくのだが，圧倒的に法学の大学であった.[103] ボローニャは法学部の外国人学生のギルドを中心に始まった大学であった．

ボローニャ大学とパリ大学は学生と教師のギルドとしての国際的高等教育機関，研究機関として生まれ，発展していく．そしてこの２つの大学からヨーロッパに数多くの大学が生まれていく．ギルドには，親方，職人，徒弟がいた．それらは，大学では，教師（ドクター /マスター），（リケンティアトゥス，）バチェラー，学生であった．大学教授資格は教師のギルドが認定した者だけに与えられた．

パリ大学とボローニャ大学は創られたものではなく自然発生的に生まれてきたのであるが，普遍的な２つの権威，教皇と皇帝が認可していくようになる．

102 ラシュドール，『大学の起源・上』, 340–2.
103 Ibid., 204–8.

皇帝と教皇の認可は，新たに生まれてくる他の大学にも及んでいった．皇帝と教皇は，自らの目的のために新たに大学を設立し，他に生まれてくる大学も認可していくようになる．

大学の研究には自由があった．修道院附属学校よりも自由な都市の大聖堂付属学校にはより大きな自由があったし，そこから生れた大学には，それまでよりも大きな自由があった．12Cルネサンスという古代ギリシア・ローマの世俗的学術文化の発展の中で生まれた大学には自由な雰囲気があった．特に初期の世俗大学ボローニャは実用的な法学研究，教育の場であり，財源である学生，市からの要求を除いては，ほぼ研究・教育の制限はなかったと考えられる．しかし教会的大学パリはローマ・カトリック教会のための教育，研究が期待されており，教会からの経済的援助も受けていた．教会法研究は認められていたが市民法は禁じられた．パリ大学は教会から離れた神学を行うことを望んでもいなかったであろうし，行うような環境にはなかった．その変化が最初に起こるのは，しばらく後の時代，プロテスタント宗教改革へと向かう時代の中でのことである．

参考引用文献

五十嵐修. 2001.『地上の夢　キリスト教帝国：カール大帝の＜ヨーロッパ＞』. 講談社選書メチエ224.

_____. 2004.「『帝国』のゆくえ：カールの皇帝戴冠（800年）直後のフランク・ローマ・ビザンツ」『東洋英和大学 人文・社会科学論集21』. 1-22.

_____. 2010.『王国・教会・帝国：カール大帝期の王権と国家』知泉書館.

池上俊一他. 2021.『都市から見るヨーロッパ史』放送大学.

池谷文夫. 2019.『神聖ローマ帝国：ドイツ王が支配した帝国』刀水書房.

ヴェルジェ , ジャック. 1979.『中世の大学』大高順雄訳. みすず書房.

ウォード＝パーキンズ, ブライアン. 2020.『ローマ帝国の崩壊［新装版］：文明が終わるということ』南雲泰輔訳. 白水社.

エーヴィヒ, オイゲン. 2017.『カロリング帝国とキリスト教会』瀬原義生訳. 文理閣.

カルメット, ジョゼフ. 1968.『シャルルマーニュ』川俣晃自訳. 文庫クセジュ . 白水社.

柏木英彦. 1985.『アベラール：言語と思惟』創文社.

河井田研朗. 1979.「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』（Admonitio Generalis）（七八九年）の試訳」『キリスト教文化研究所年報』1.ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研

究所. 117–150.
_____. 2004.「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』（Admonitio Generalis）（789）の注解」『福岡大学人文論叢』36, 4. 1273–1295.
カヒル, トマス. 1997.『聖者と学僧の島』森夏樹訳. 青土社.
キーン, モーリス. 1992.『ヨーロッパ中世史』橋本八男訳. 芸立出版.
クラーク, ジリアン. 2015.『古代末期のローマ帝国：多文化の織りなす世界』白水社.
児玉善仁. 1977.「Studium generaleの概念―その普遍性と法的根拠をめぐって―」『イタリア学会誌』第25号, 133–143.
_____. 2007.『イタリアの中世大学』名古屋大学出版会.
児玉善仁, 赤羽良一, 岡山茂他編集. 2019.『大学辞典』平凡社.
コンスタブル, ジャイルズ. 2014.『十二世紀宗教改革：修道制の刷新と西洋中世社会』高山博監訳. 慶應義塾大学出版会.
齊藤寛海編. 2021.『世界歴史大系　イタリア史 2：中世・近世』山川出版社.
サザーン, R. W. 2007.『西欧中世の社会と教会：教会史から中世を読む』上條敏子訳. 八坂書房.
ザッカニーニ, グイド. 1990.『中世イタリアの大学生活』児玉善仁訳. 平凡社.
佐藤彰一. 2009.『中世世界とは何か』岩波書店.
_____. 2017.『カール大帝』山川出版社.
澤田典子他. 2018.「地中海世界における『古代』と『中世』：西洋史学と世界史教育のあいだ」『千葉大学教育学部研究紀要』66-2. 267–276
ジェラール, A. 1995.『ヨーロッパ中世社会史辞典』池田健二訳. 藤原書店.
島田雄次郎. 1990.『ヨーロッパの大学』玉川大学出版部.
シャルル, クリストフ. ジャック・ヴェルジェ . 2010.『大学の歴史』岡山茂, 谷口清彦訳. 白水社.
高山博. 1999.『中世シチリア王国』講談社現代新書.
谷和雄. 1994.『中世都市とギルト：中世における団体形成の諸問題』刀水書房.
ディルセ―, ステファン. 1988.『大学史（上）』池端次郎訳. 東洋出版社.
出村彰. 2005.『中世キリスト教の歴史』日本キリスト教団出版局.
野口洋二. 2000.「訳者あとがき」ハスキンズ, チャールズ・H.『十二世紀ルネサンス』野口洋二訳. 創文社.
ハスキンズ, チャールズ・H. 1997.『十二世紀ルネサンス』別宮貞徳, 朝倉文市訳. みすず書房.
_____. 2009.『大学の起源』青木靖三, 三浦常司訳. 八坂書房.
半田智久. 2010.「セブンリベラルアーツはどこから来た何ものか」『お茶の水女子大学人文科学研究第 6 巻』. 149–160.
ピレンヌ, アンリ. 1968.『ヨーロッパ世界の誕生：マホメットとシャルルマーニュ』中村宏, 佐々木克巳訳. 増田四郎監修. 創文社.
ピレンヌ, H. 他. 1983.『古代から中世へ：ピレンヌ学説とその検討』佐々木克巳編訳. 創文

社歴史学叢書.
フェルテン, フランツ. 2010.『中世ヨーロッパの教会と俗世』甚野尚志編. 小山寛之訳. 山川出版社.
藤崎衛監修. 2015.「第四ラテラノ公会議（1215年）決議文翻訳」『クリオ』29号（2015）. 87–130.
藤原淳賀. 2021.「中世における大学を備えたもの：自由七科，カロリング・ルネサンス，そして12世紀ルネサンス」青山学院大学宗教主任研究叢書『キリスト教と文化（36）』, 57–88.
ブラウン, ピーター . 2006.『古代末期の形成』足立広明訳. 慶應義塾大学出版会.
_____. 2016.『古代末期の世界』宮島直機訳. 刀水書房.
フリシュ , オーギュスタン. 2020.『叙任権闘争』野口洋二訳. ちくま学芸文庫.
ブルクハルト, ヤーコプ. 2019.『イタリア・ルネサンスの文化・上』新井靖一訳. 筑摩書房.
_____. 2019.『イタリア・ルネサンスの文化・下』新井靖一訳. 筑摩書房.
別府昭郎. 2011.『＜大学＞再考：概念の需要と展開』知泉書館.
堀米庸三編. 1980.『西欧精神の探求：革新の十二世紀』日本放送協会.
松本宣郎編. 2021.『世界歴史大系　イタリア史 1：古代・初期中世』山川出版社.
三成美保. 2015.「中世ローマ法学――註釈学派と注解学派」
https://ch-gender.jp/wp/?page_id=1955
三佐川亮宏. 2018.『紀元千年の皇帝：オットー三世とその時代』刀水書房.
横尾壮英. 1992.『中世大学都市への旅』朝日新聞社.
_____. 1999.『大学の誕生と変貌：ヨーロッパ大学史断章』東信堂.
ラシュドール，ヘイスティングス. 1966.『大学の起源・上：ヨーロッパ中世大学史』横尾装英訳. 東洋館出版社.
_____. 1970.『大学の起源・中：ヨーロッパ中世大学史』横尾装英訳. 東洋館出版社.
ル=ゴフ, J. 2005.『中世とは何か』池田健二, 菅沼潤訳. 藤原書店.
_____. 2014.『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』菅沼潤訳. 藤原書店.
ルーベンスタイン, リチャード・E. 2019.『中世の覚醒：アリストテレス再発見から知の革命へ』小沢千重子訳. 筑摩書房.

Burnett, Charles. 2001. “The Coherence of the Arabic-Latin Translation Program in Toledo in the Twelfth Century.” *Science in Context* 14 (1/2). Cambridge University Press. 249–288.
Burns, James. 1907–1913. “Alcuin,” Ed. Charles G. Herbermann et al., *The Catholic Encyclopedia: An International Work of Reference on the Constitution, Doctrine, Discipline, and History of the Catholic Church*. New York: The Encyclopedia Press; The Universal Knowledge Foundation.
Chadwick, Henry. 1990. *Boethius: The Consolations of Music, Logic, Theology, and Philosophy*, Clarendon Paperbacks. Oxford: Clarendon Press.

Cross, F. L. and Elizabeth A. Livingstone, Eds. 2005. *The Oxford Dictionary of the Christian Church*. Oxford, New York: Oxford University Press.

Dales, Douglas. 2012. *Alcuin: His Life and Legacy*. James Clarke and Co.

De Ridder-Symoens, Hilde. Ed. 2003. *A History of the University in Europe: Volume 1. Universities in the Middle Ages*. Cambridge: Cambridge University Press.

Haskins, Charles H. 1898. "The Life of Medieval Students as illustrated by their Letters." *The American Historical Review*. Vol. 3. No. 2. January. 203–229. https://www.jstor.org/stable/pdf/1832500.pdf

Healy, John. 1907–1913. "Abbey and School of Clonmacnoise." Ed. Charles G. Herbermann et al. *The Catholic Encyclopedia: An International Work of Reference on the Constitution, Doctrine, Discipline, and History of the Catholic Church*. New York: The Encyclopedia Press; The Universal Knowledge Foundation.

Lejay, Paul, and Joseph Otten. "Cassiodorus." Ed. Charles G. Herbermann et al. *The Catholic Encyclopedia: An International Work of Reference on the Constitution, Doctrine, Discipline, and History of the Catholic Church*. New York: The Encyclopedia Press; The Universal Knowledge Foundation, 1907–1913.

Louw, Johannes P. and Eugene Albert Nida. 1996. Greek-English Lexicon of the New Testament: Based on Semantic Domains. New York: United Bible Societies.

McKeon, Peter R. "*Concilium Generale and Studium Generale*: The Transformation of Doctrinal Regulation in the Middle Ages."Church History 35 no. 1. Mar 1966. p. 24-34.

Rand, Edward Kennard. *A Survey of the Manuscripts of Tours*, volume I. Text. Cambridge, MA: The Mediaeval Academy of America, 1929. https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015020077379&view=1up&seq=7

Rashdall, Hastings. 2010 [1895]. *The Universities of Europe in the Middle Ages. Volume 1: Salerno, Bologna, Paris*. Cambridge University Press.

_____. 2010. *The Universities of Europe in the Middle Ages. Volume II, Part II: English Universities-Student Life*. Cambridge University Press.

Rees, Elizabeth. 2003. *Celtic Sites and Their Saints: A Guidebook*. Bloomsbury Publishing.

Ridder-Symoens, H. Ed. 2003. *A History of the University in Europe. Volume 1. Universities in the Middle Ages*. Cambridge University Press.

Shepherd, William R. 1911. "Mediaeval Universities." *Historical Atlas*. Perry-Castañeda Library Map Collection. University of Texas Libraries. New York: Henry Holt and Company. 100. https://maps.lib.utexas.edu/maps/historical/history_shepherd_1911.html https://maps.lib.utexas.edu/maps/historical/shepherd_1911/shepherd-c-100.jpg

_____. 1926. "Europe and the Mediterranean Lands about 1190." Historical Atlas. Perry-Castañeda Library Map Collection. University of Texas Libraries. 70-71. https://maps.lib.utexas.edu/maps/historical/shepherd/europe_mediterranean_ 1190.

jpg
https://maps.lib.utexas.edu/maps/historical/shepherd_1911/shepherd-c-069.jpg
_____. 1929. *Historical Atlas*. New York: Barnes and Noble.